

デジタルヘルス・AI時代における 病院薬剤師の新たな使命

栃木県病院薬剤師会会長
獨協医科大学病院病院長補佐薬剤部長
臼井 悟 Satoru USUI



医療の現場では、デジタル化の波がこれまでにない速さで押し寄せています。電子カルテや遠隔医療の普及に加え、AIを活用した診断支援や創薬の革新など、医療の姿は大きく変化しつつあります。このような環境のなかで、病院薬剤師は「医療情報の専門家」として、より多様で高度な役割を担う時代を迎えています。

これまで病院薬剤師は、医薬品の適正使用を通じて医療の質と安全を支えてまいりました。しかし、今求められているのは、データやテクノロジーを理解し、医療現場の判断を支援できる薬剤師像です。患者一人ひとりのデータに基づく個別化医療が進むなか、薬剤師がAIやデジタルツールを適切に活用して得られる知見は、医師や看護師を含むチーム医療に新たな価値をもたらします。

近年注目を集める生成AIも、私たちの業務に大きな変化をもたらす可能性を秘めています。AIは膨大な情報を瞬時に整理・分析し、文献検索、プロトコル作成、説明文書の草案など、これまで多くの時間を要した作業を効率化します。これにより薬剤師は、より多くの時間を患者ケアや臨床判断の支援に充てることが可能です。一方で、AIの出力には誤りや偏りが含まれる場合もあり、倫理的配慮と安全な運用ルールが不可欠です。そのため、技術を「使いこなす力」と「見極める力」の双方を磨くことが、これからの専門職に求められる資質であると考えられます。

今後、病院薬剤師がAIやデジタル技術を活用する場面は、さらに拡大していくことでしょう。調剤支援システムの高度化、薬剤情報のリアルタイム共有、患者指導へのインタラクティブAIの応用など、その可能性は計り知れません。重要なのは、技術の導入を目的化するのではなく、「患者中心の医療」という原点を見失わないことです。AIは私たちの専門性を補完する道具であり、人の思いやりや倫理観に代わるものではありません。

デジタルヘルス時代における病院薬剤師の使命は、単に技術を取り入れることではなく、医療チームのなかで「デジタルと人間性の橋渡し」を担うことにあります。AIがもたらす効率性の恩恵を享受しつつ、患者の声に耳を傾け、寄り添う姿勢を大切にします。そのバランス感覚こそが、これからの薬剤師像を形づくる鍵となります。

私たちは今、新しい時代の入り口に立っています。技術を恐れず、しかし盲信せず、知識と経験をもってAIを安全かつ有効に活用する——その姿勢こそが、医療の質をさらに高め、次の世代へ確かな希望をつなぐ道だと信じています。

会員の皆様とともに、この変化を前向きに受け止め、新しい時代の薬剤師像をともに作り上げてまいりたいと考えています。